

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(5)

リレー随筆

ワサビ

(静岡県農業試験場わさび分場 大谷 清和)

はじめに

ワサビ (*Wasabia japonica* MATSUM) は、アブラナ科に属する常緑、多年生の植物で、数少ない日本原産の野菜として、古くから各地の谷沢や溪流の原生林地に自生分布している。

ワサビ栽培が始まったのは、慶長年間(1596～1615)に静岡県の安倍川上流にある有東木が発祥の地であるとされている。その地によれば、村人が近くの山(通称わさび山)に自生していたワサビを採取し、家の近くの湧水地に植えたところ、予想外の良質ワサビができたことから、ワサビ栽培が近在に広まっていたとされている。

このころ駿府(静岡市)に隠居していた徳川家康に、有東木からワサビが献上され、その味の優れていることや葉の形が徳川家の家紋に似ていることから、有東木から門外不出品の御法度品とされたといわれている。

延享元年(1744)、天城御領地の山守であった板垣勘四郎が、伊豆代官の命を受け、有東木にシイタケ栽培の指導に赴いた。その任務を終えた帰りにご禁制のワサビ苗を持ち帰り、栽培普及したのが伊豆地方におけるワサビ栽培の始まりとされている。

その後、ワサビ栽培は県下全域に広がり、天城湯ヶ島町、中伊豆町など28市町村で栽培されており、平成5年の生産規模は、栽培面積156ha、生産量498tで、

長野県に次いで全国2位、粗生産額は2,063百万円で全国一を誇っている(生産規模は林野庁、粗生産額は静岡統計情報事務所)。

研究機関のあゆみ

当わさび分場は、昭和9年(1934)に山葵研究所として発足し、一貫しワサビ栽培に関する研究を続けてきたが、その間に数回にわたり名称の変更、所管替え、業務内容の更新がなされている。

昭和22年(1947)は林業指導所として、ワサビ、シイタケ栽培に関する研究が行われ、ワサビにおいては栽培条件の調査解明、優良種苗の導入、新品種の育成選抜等、広い範囲にわたっての業務がなされ、多くの注目すべき成果が得られている。

昭和33年(1958)には、狩野川台風に襲われ、県下のワサビ田はほとんど全滅する大災害があり、ワサビの復旧が急務とされる状況となり、試験課題はかなり縮小されたが、優良種苗の導入選抜等の試験なども再開されている。

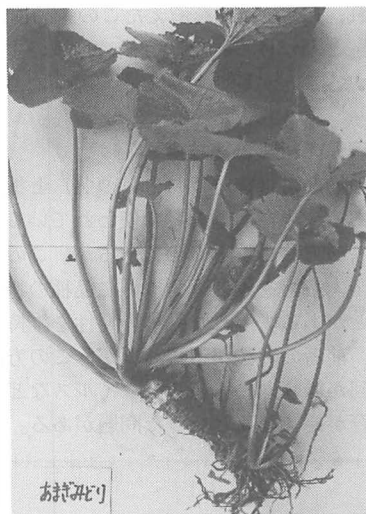
昭和36年(1961)は、県の機構改革により農業試験場わさび分場となり、以前からの試験業務を引き継ぐとともに、新しい構想による研究が開始されている。

特に優良種苗の導入選抜等では、県内外から品種系統を導入し、その特性を調査するとともに、生産力を検定し現在の主要品種である真妻種、だるま種等良い系統が得られたことは大きな成果とされている。

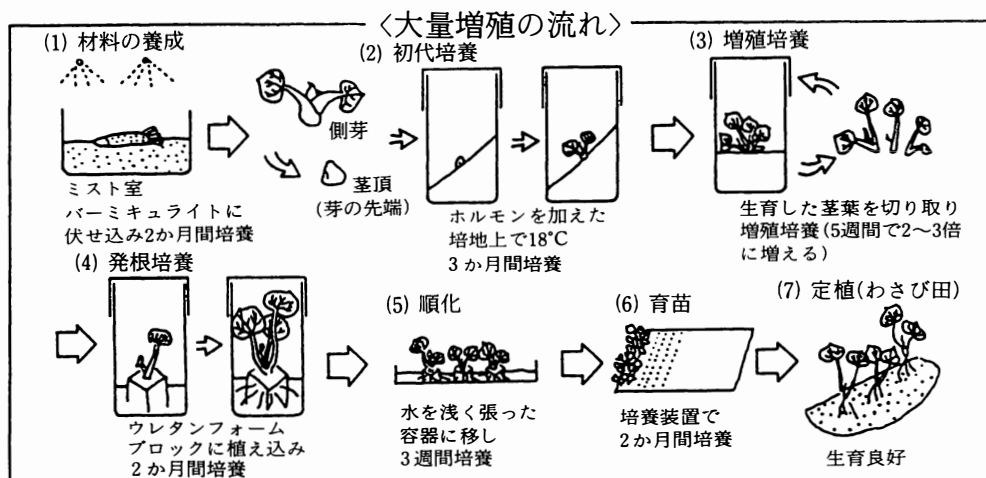
また、ワサビの主要病害である墨入病やウイルス病



わさび田風景



新品種“あまぎみどり”



についても、発生生態と防除試験に着手し、菌の生育温度、伝染方法を究明し、有効な防除手段としての無病毒確保を指摘するとともに、実生栽培の確立は大きな成果とされている。

新品種の“あまぎみどり”

ワサビの品種と言われるものは、それぞれの場所や選抜者の名前で呼ばれているのが多く、大別すると茎にアントシアニンの多い紫色系と、少ない緑色系に分けられる。

静岡県の代表的な品種“真妻”は茎が紫色系であり、和歌山県日高郡の旧真妻村から導入された系統である。

わさび分場は、より商品性の高い品種をめざして育種に取り組み、平成3年11月(1991)に品種登録し世に送り出した。生育旺盛で肥大性が良く、表皮色のみどりに優れ、上質な風味を備えたこの新品種は、“あまぎみどり”と名づけられた。今後、地域の主力品種として普及することが期待される。

優良苗確保の組織培養技術

ワサビの増殖には株分け(分けつ茎)と種子の二つの方法がある。現在、静岡県で使われている苗の3分の2は後者の方法によるものであるが、この方法では採種、育苗、栽培を繰り返すうちに品種の特性が乱れてくることがある。優れた品種の特性を維持していくためには、前者の方法が望ましいが、この方法には株分けを何回か繰り返しているとウイルスなどの病害によって生育が悪くなるといった問題がある。これらの

問題を解消し、優れた品種の苗を短期間で大量に増殖する組織培養を利用した方法を開発した。

この培養技術と養液栽培装置を効率的に利用したワサビ苗は、生育が旺盛で、従来の株分け苗に比べ1.3～1.6倍の収量があり、表皮色、形状が良く、商品性も高く、品質向上がなされた「ほんものワサビ」の生産に寄与するものと思われる。

試験研究の取り組み

静岡県ワサビの優位性を保つため、銘柄品種の維持・探索や良質苗の大量確保等の安定的な生産技術の開発に取り組んでいる。まず、品種改良は育成目標である「より良質で調整作業等が省力できる多収の品種」を育成するため、交雑育種により育成選抜を行い有望な系統を確保している。次に、バイオテクノロジーを応用した優良種苗の大量増殖技術は低コスト化に課題は残っているが、おおむね確立をみていると思われる。しかし、実生系ワサビ生産も捨てがたいので良質なワサビを生産するための採種技術を検討している。

さらに、生産条件や作型開発の改善の検討をし、ワサビを効率的に生産するための生産条件や作型改善の資料を収集している。

その他、流通販売の改善検討として、出荷包装資材の開発や生食用ワサビの需要動向調査に取り組み、生産方向への提言を行っている。このようなことにより、静岡ワサビとして特長ある良品を安定生産するための技術集積を行っている。